

東日本大震災—被災地に思いを寄せて、

私たちにできる支援を持続的に

長沢正貴 (埼高教)

全教・全労連が提起する震災救援ボランティアとして、県立高校の先生2人とともに宮城県に入り、4月4日から3日間の活動をしてきました。

仙台市内に設置された「震災共同支援センター」からの指示を受けて、はじめの2日間は塩竈市、3日目は多賀城市での活動となりました。どちらも海沿いの地域は津波によって甚大な被害を受けた市です。市内を車で進んでいくと、津波が襲った地域に入った瞬間、景色が一変します。街全体が乾いた土色に覆われ、店舗はほとんど営業していません。路肩には泥にまみれて動かなくなった車が放置され、あちらこちらに水に浸かってしまった畳や家電製品などが積みあげられています。さらに海の方向へと向かうと、目の前が一面「瓦礫」になりました。ようやく車が通れるようになった道を進んで行くと、原形をとどめないほどに倒壊した家や、つぶれて折り重なっている車、工場地帯から流されてきて横倒しになったタンクローリー車などが次々と目に飛び込んできます。こうした被害の大きな地域では、いまでも消防や自衛隊などによる行方不明者の捜索が続いており、私たち素人のボランティアが入って何かできるという状況ではありませんでした。

私たちは、浸水による被害はあったものの倒壊は免れた家の片付けを、3日間で6軒ほど手伝いました。地域によっては水が引いてからすでに何日か経過しているのですが、もう概ね片付いている家もありましたが、特に高齢の方だけで暮らしているお宅などでは、なかなか思うように片付けが進んでいない様子でした。

被災地の学校、児童・生徒、そして教職員の状況を伺うために、夜、宮城高教組の事務所を訪ねました。対応してくれた役員の方が、津波によって窓という窓がすべて割れてしまつて廃墟となつた4階建ての学校の写真を見せてくれて、「この学校では津波の時、生徒と教職員は校舎の屋上に避難していたが、波が校舎の4階まで来てみんな『もうダメだ』と思った」という話を聞き、体が震えました。また、震災後、各学校から寄せられる就職内定者の状況についての情報の中には、「この3月の卒業生で就職が内定していた約150人のうち、およそ1/3が『内定取消』あるいは『自宅待機』になつてしまった」という報告もあるとのことでした。

実際に現地に入ってみて、被災した地域の復興は本当に長い道のりであり、地域や段階によっていろいろな支援の力が必要になるだろうと感じました。私たちは引き続き、できることを、持続的に行っていくことが大切だと思います。特に教育の現場で働く仲間として、被災地の学校やそこに通う子どもたち、そして教職員の思いに心を寄せながら、一日も早く学校に笑顔が戻るように、できる支援を続けていきたいと思います。



3月31日の「河北新報」1面。津波の直撃を受けた気仙沼市にある校舎の写真が痛々しい

ボランティアの作業の一つは、浸水した家屋の片付け。家財道具をすべて運び出してから、高圧洗浄機で丁寧に泥を落としていく。(4月4日)



塩竈市役所の受付に置かれた支援の飴。埼玉のお菓子業者が贈ったものだった。(4月6日)



宮城県労連に設置された「共同支援センター」には、全国から支援物資やボランティアが集まっていた。(4月4日)